

北海道合鴨水稻会

水かき通信

合鴨フォーラム北海道大会開催迫る！！

合鴨と育む共生の大地

—合鴨、北へ飛んだ！！—

～拡大全国世話人会・第3回実行委員会報告～

報告者 木村 篤

第6回圃場見学会2日目の7月16日に、午前中から拡大世話人会が、10月19日に第3回実行委員会が開かれました。

拡大世話人会の目的は全国合鴨フォーラム北海道大会を開催するにあたり、北海道大会の構想・内容、進捗状況等を大会実行委員会が全国世話人会に報告し、確認をとることにありました。また、今回の北海道大会は全国合鴨水稻会の創立10周年を記念する大会でもあるということで、全国世話人会が催す記念行事に関する話し合い、日程等の調整も合わせて行なわれました。さらに、10周年記念行事の一貫として出版された合鴨料理

本の扱いについて議論されました。

話し合いは、まず大会実行委員会の方から大会運営の報告、進捗状況を全国世話人会に説明し、そのあと全国世話人会からの意見、提案を受けるという形で進められました。

検討された中間報告の主な内容は別紙のような事項です。大会開催理念において、ここ10年間で西日本から北海道に合鴨農法が広がったこと、厳しい自然条件のもとでの合鴨農法実践の地・北海道で、全国フォーラムが開催されることの意義が謳われています。

また、北海道合鴨水稻会の会員

は様々な考えをもって合鴨農法を実践・関与していることから、こじんまりとまとまった形にするのではなく、点在する多様な意見を持つ会員が線で結ばれ、面を作って広大な大地に根をおろしている北海道合鴨水稲会の特徴を活かした大会を成功させたいという実行委員会の意思を表明しました。

北海道の実行委員会からの中間報告に対して拡大全国世話人会からの提案・質問を受けました。主に大会内容について、個別報告において全国に共通する話題が必要ではないか、プレフォーラムには例年通り初心者講習が必要ではないかといった提案が出されました。

以上のような話し合いを通して、今後実行委員会が大会理念に沿って、いかに全国世話人会と議論・検討した内容を組み込

んでいくかが課題として残りました。

以上のような拡大世話人会での議論を踏まえて、第3回実行委員会が開かれました。第3回実行委員会での議題は、大会テーマ決定を中心に多岐に渡りました。大会テーマは「合鴨と育む共生の大地」で、キャッチコピーは「合鴨、北へ飛んだ!!」に決定しました。多くの議題は審議中であり、第4回実行委員会を11月中～下旬に行ないます。決定事項については、水かき通信(12月発刊予定)を報告したいと考えています。

大会内容についての提案がありましたら、各ブロックの実行委員(別紙参照)に連絡して下さい。

(北海道大学大学院修士課程)

(*~o~*) \ (^o^)/ (*~*~*)
ママさんのありのママ (#^_^#)

川本 知子

川本農園に実習に入って1年目、結婚して2年目、3年目は子どもが生まれたので農作業はタッチせず、子育てに専念…と、まだアイガモ農法にたずさわって、月日が浅いので、実習生の

頃の認識の域を出てません。でも、今年の夏は子どもをおんぶしながら何回か田んぼのカモに餌をやりに行きながら想像しました。そのうち、子どもと一緒に田んぼに入ってカモたちと草取りをしたり、餌やりの当番を

決めたりして、楽しく、アイガモ農法をやっていけそうだなあ…と。

田植えの頃、片手にのるほど小さかったヒナたちが2ヶ月のうちに見違えるほど、大きくなって田んぼでお役目をはたしてもらったあと8月にはお別れ…と、毎年あつという間のふれあいのような気がします。人間様の都合で掛け合わされて、飛べない鳥として生まれてきて、たった1回の田んぼの仕事が終わったら、お肉となる短い命。アイガモ農法は、やっぱり人間のゴーマンな農法なのかとちょっと心が痛むこともありましたがカモだけではなく、私たちが生きていくために、いろんな命を頂いているのは事実だし、無益な殺生をしているわけではないのだから、とこの頃は納得するようにしています。私たちのお役に立ってもらっているのだからせめて川本農園にいる間は楽しくすごしてもらいたいと(カモたちにとって、どういのが楽しいのかわかりませんが)考えます。

田んぼから引揚げてからも、その命をきちんとまっとうさせてもらうために、カモを使っている私たちが大事にその肉を頂かねば、と思うのですが、まだまだ私の料理の腕が悪いのと、鶏肉のような癖のない味になれ

てしまっている私にとって、カモ肉は今のうちの食卓からちょっと遠い存在です。これからの私の研究課題としましょう。

うちのアイガモの田んぼは毎年たいてい道路沿いにあるので6~7月ドライブに通りがかった人が珍しそうに車から降りて見て行くことがたまにあります。こういう点では(カモが田んぼにいる間は)アイガモ農法は目をひくし、消費者の人にアピールしやすいのが最大の利点だと思います。消費者の人たちに実際にカモが田んぼで泳いでいる姿を見てもらって、できたら一緒に田んぼに入って草を取ったり、カモたちに声をかけたりしながら、半日でも田んぼで過ごしてもらえたらなあ…。その後で、青空の下、アイガモ米のおにぎりをほおぼってもらって交流できたら…。というのが、私の夢です。

私自身、ここで暮らすまでは都会の消費者の立場でしたからできるだけたくさんの消費者にお米や野菜やいろんな食べ物がどうやって作られるのか体験してほしいと余計に思うのかもしれませんが、だから、私にはアイガモの田んぼは消費者と農家をつなぐ頼もしい架け橋に見えるのです。

(北竜町合鴨農法実践者)

第6回北海道合鴨水稲会圃場見学会の報告

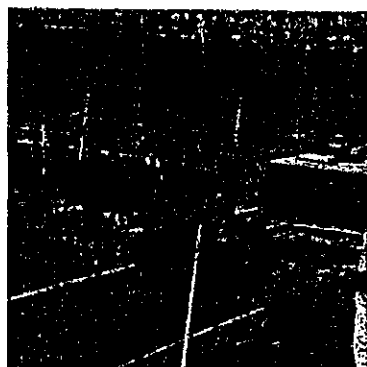
報告者 木村 篤

はじめに

去る7月15、16日に毎年恒例の初夏の年中行事である圃場見学会が道南ブロック主催で北広島市のタカシマファーム(高嶋浩一さんの圃場)で行われました。第6回目になる今回の圃場見学会には水稲会会員だけでなく、合鴨農法に関心をもつ消費者、また例年とは違い、来年2月に開催される全国合鴨フォーラム北海道大会を控え、全国合鴨水稲会事務局・世話人14名がはるばる北の大地の合鴨農法を直接見るためにやってきました。その結果、総勢50名程が見学会参加者として集いました。

見学会場となったタカシマファームは夕張川にほど近い広大な水田地帯に位置し、その経営面積は北海道合鴨水稲会なかでも大規模です。

また、タカシマファームでは「田園交響楽」という独自のブランドによる販売を通じて、消費者との交流を図っており、経営主である高嶋さん自身の哲学がそこに見えてきます。



(圃場の片隅にいる合鴨くん。高嶋さんのようにバイタリティーに満ち溢れていた。)

見学会にて

圃場では経営主である高嶋さんを囲むかたちで様々な質問や意見が交わされました。特に、全国各地から北海道にやってきた世話人の方々は、北海道の合鴨農法と自分たちとの違う点に大きな興味をもったようで、高嶋さんに稲の品種・栽培方法、水管理の工夫、合鴨を飼う上での技術的な側面などについて具体的に質問するといった場面が多く見られました。



(萬田先生(左から二番目)を交えて。懇親会でからむ学生に真の自然と合致する農法を生産現場で見出すことを教えられた。)

全国世話人の多く方は、主に西日本からの参加だったので、その気候風土による違いだけではなく、合鴨圃場の大きさの違いをも肌で感じたのではないのでしょうか。



(とても手入れが行き届いた圃場。「うーん」とうなずく方も多かった。)



(道南ブロックの築城氏、高嶋氏、谷口氏のスムーズな進行。学生もうっとり?)

圃場を見学した後、圃場から納屋に場所を替え、高嶋さんから説明を受け、質問が繰り広げられました。また、全国合鴨水稲会事務局・世話人の自己紹介を兼ねる場ともなりました。



(岩手県の世話人大宮氏。世界のあちこちに農の達人はいるのかもしれない。)

長沼温泉にて

圃場見学会終了後、高嶋ファームを後にし隣接した町長沼町にあ

る長沼温泉に移動しました。ゆっくり温泉につかって汗を流し、夜は長沼ジンギスカン。ジンギスカンは北海道ならではのもの。道外から来て下さった各地の世話人の口には合ったかしら？

ジンギスカン完食後は、寝室の畳の上での懇親会が開かれました。酒を呷りながら実に充実した場が持たれたと確信しています。タカシマファームでの自己紹介とは違って、皆さん酒が入ると実に素敵な(?)自己紹介でいくら持ち時間があっても足りない。

全国からやってきた世話人の方々も北海道合鴨水稲会の足並みの良さ、全国合鴨フォーラムへの意気込みを感じたことでしょう。

思うところ

何といっても、今回の圃場見学会では、全国から生産者が訪れたという点で大きな意味があったと思います。

合鴨農法という共通する農法をもって稲を育てていながらも、北海道と本州を比べてみると全く異なる自然環境のもとで、その農法は実践されています。今回の圃場見学会では、本州の実践者が実際に北海道での合鴨農法を観察し、意見

を交わすことで、北海道と本州との差異を実感するとともに、両地域の実践者は互いに大きな刺激を受けたのではないのでしょうか。

そうした互いに受けた刺激は、互いの合鴨方法の実践の場においても何らかの影響を与えることだと思います。限られた時間であったにも関わらず、両地域の実践者の間に合鴨農法の多くの共通点と相違点が挙げられました。

来年2月に開催する全国合鴨フォーラムでは、全国から多くの生産者が北海道を訪れることとなります。そこでは、北海道の水稲作、合鴨農法といったことについてだけでなく、農とは何であるのかといった根源的なことも含め、様々な観点から考える機会となることでしょう。

そうした期待を裏切らないように、全国から様々な考えを持ち、合鴨農法に習熟した生産者たちが、より深い交流が実現できるような場、そのようなフォーラムを作り上げなければと感じさせる圃場見学会でした。

(北海道大学大学院修士課程)

全国合鴨フォーラムまで、127日♪

(10月23日現在)

回数未定の連載エッセイ①

繋がりはいつも

あいかもね

大窪 宗磨

北海道合鴨水稲会も、平成6年(1994年)に設立して6年が経ち、当会を中心に全国合鴨フォーラムが2001年2月27日(火)・28日(水)に行なわれるまでになりました。本号から詰めの甘さが課題(学業から恋愛に到るまで?)の事務局員大窪宗磨の回数未定の連載エッセイによって、当会の魅力を探っていこうと思います。

さて、僕と合鴨くんとの出会いは今から5年前。圃場見学会に参加したのがきっかけ。その頃の僕は、大学生活にも馴染みちよびりおませになり、世の中には上を向けば星の教程うれしいことがあり、下を向けば砂の教程悲しいことがあることを知った頃。それから、ずっと事務局をやらせてもらっています。振り返ってみると、ここ5年間続けてきたのは事務局だけですね。(あつ、忘れてた、学業もでした…)

この5年間、農業関係者の多くは「農業は大変だ」と大合唱。マス

コミも、それを追っかけ単調な輪唱。けれど、合鴨くんの住む圃場からは、人を優しく、うれしくさせるハーモニーが聞こえてくるのになあ…。

ところで、僕が目から見た合鴨水稲会を一言でいうと、うーなんやろ、会員が日常生活の「厳しさ」と「優しさ」を持ち寄る場だなあと思う。そして、いろんな価値観をもった人に出会え、繋がる場だ。きっかけはなんであれ、合鴨くんに興味を抱いた人が集まる。この場では、せっかちに多様な価値観を一つにまとめようとはしない。その前に、互いの価値観を相手の立場になって考えることが先だと皆が知っている大人の会だと思う。

次回から、そんな会を通して農の神様(時々酔っぱらいの神様にとりつかれる)とも思える人たちと出会い、学んだことを振りかえりつつ、当会が魅力ある人と人を結びつける謎を解こうと思う。あれっ、繋がりはいつもあいかもね!

(北海道大学大学院博士課程)

事務局よりお知らせ

□全国合鴨フォーラムについて

① 食材について

全国合鴨フォーラム北海道大会での懇親会の食材を北海道合鴨水稲会会員が作ったものを提供したいと思っています。会員の方で、提供していただける食材があれば、事務局まで連絡してください。

② 合鴨料理本について

同封した「合鴨料理本発刊・購入のお知らせ」についてですが、申し込み〆切が11月10日(金)となっております。購入ご希望の方は、お気軽に申し込んでください。北海道に「合鴨肉を食卓に」という食文化を定着させましょう！

□水かき通信記事投稿の募集

水かき通信に載せたい原稿を気軽に事務局に送ってください。来月号掲載の記事については、12月1日(金)が〆切です。

□北海道合鴨水稲会入会案内

当会の主な活動は、総会及びフォーラム、圃場見学会、『水かき通信』の発行、全国合鴨フォーラムへの会員派遣等です。入会されますと、行事の案内状、『水かき通信』が届きます。入会手続きは、当会事務局に連絡して頂くと入会申込書を送りますので、それに記入され送り返して頂き、年会費6,000円を納入して頂くと入会できます。

□会費納入のお願い

2000年度の会費6,000円を12月初旬までに以下の郵便振替口座に振り込んで下さい。同封した郵便振替払込書を使われますと、手数料はかかりません。

口座番号:02700-3-38241

加入者名:北海道合鴨水稲会

払込払出局:札幌北七条郵便局

編集後記

□合鴨水稲会事務局も、少しずつ世代交代。

つつい心配で自分でやってしまうが、思いきって事務作業を後輩に丸投げするとずんなりこなす。引き続き木村くん、そして大学院に進学予定の日向貴久くんに事務の大部分を引き継ぐ。時が経つのは早いもので、事務局やって5年。僕の失敗をフォローしてくれた優しさだけを思いだす。失敗と優しさで事務局は成り立っています。(大窪)

□すっかり秋も深まり、人肌が恋しいものです。

最近秋の長夜を一人枕濡らすことも多く

なりました。人生って切ないですね。(木村)

北海道合鴨水稲会 水かき通信 第11号

2000年10月23日発行

発行:北海道合鴨水稲会

(連絡先)北海道合鴨水稲会事務局

〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目

北海道大学大学院農学研究科

農業経済学講座

大窪 宗磨・木村 篤・日向 貴久

TEL:011-706-4997

FAX:011-706-4179

北海道合鴨水稲会

水かき通信

第11全国合鴨フォーラム北海道大会報告

報告者 木村篤

去る2月27、28日の両日に今世紀最初となる、第11回全国合鴨フォーラム北海道大会が札幌市の定山溪温泉「定山溪ホテル」で開催されました。大会の開催には全国合鴨フォーラム北海道大会準備委員会が発足して以来、実行委員会へと運営が移るなか、実に2年を費やして準備をしました。

大会のテーマは、「合鴨と育む共生の大地～合鴨北へ飛んだ！～」。今回は全国合鴨水稲会設立の10年目の節目となる大会です。この10年で合鴨水稲同時作は西日本から北海道まで広がりました。この10年の想いをお互いに確認し、今後に伝える大会

でもあります。道内から約140名、道外からの参加を含めると約300名が大会に集いました。

大会は、午前中のプレフォーラムを皮切りに、午後から本大会が始まり、翌28日にかけて行われました。北海道主催の大会は2日目の朝まで、その後は全国合鴨水稲会の10周年記念行事になりましたが、今大会の目的は十分に達成でできたと思います。

プレフォーラム

午前10時からのプレフォーラムは、北海道大学名誉教授の但野利秋氏による「合鴨米の品質と食味をめぐって」と題した講演が行なわれました。午前中から遠方より多くの人が集ま